
継家族

fumia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

継家族

【コード】

N9390V

【作者名】

fumia

【あらすじ】

とある事情から、自分達夫婦とは血が繋がっていない事を隠し続けてきた継父の雅彬と、ふとした偶然からその事実を知ってしまった継娘の桃香。そんな二人が、桃香の修学旅行に関して対立してしまう。彼女の実の両親が飛行機事故で亡くなっている事が気に病んで許可を下ろせない父親と、どうしても海外旅行へ行きたい娘。そんな一組の父娘の物語。（注：この作品は、以前投稿した作品を改稿・編集し、新しく書き直した物です。主要登場人物の名前の一部を別の作品で使い回した為、その人物名を別名に変えたり等、改造

を施しています。
(

プロローグ

元華族の血筋で、政財界にも強い影響力を持つ桐谷家本家の、一万坪にも達する広くて大きな日本家屋風の豪邸である本邸では、現当主権三郎の三女の雅と、彼女の夫であった石路 達彦の葬儀がしめやかに、しかし盛大に行われていた。

喪主を当主である今年65歳になる権三郎自身が務め、葬儀自体の手配の一切を、桐谷家が株式の殆どを占有し、一族で経営している桐谷グループの傘下にある冠婚葬祭企業に委任し、多くの弔問客が訪れる中、屋敷の一角に造られた親族専用の控え室では、共に享年25歳という若過ぎる二人の死を嘆き悲しんでいる訳でもなく、かといって悲しい出来事とはいえ、親族一同が久々に会せたことを喜ぶわけでもなく、非常に剣呑とした空気がその場を覆っていた。

その理由の一つは、莫大な石路家の遺産である。雅が結婚した石路 達彦が、既に両親が二人とも他界している身の上である上に、年商500億円以上もたたき出す大企業の石路コンチエルの社長であった事である。彼の亡き後、石路コンチエルその物は彼の弟で、専務として兄の右腕として支えていた孝彦が後任の社長に就任し受け継いだ。彼自身が所有していた不動産などの莫大な資産は彼と彼の妻である雅との間に生まれた子供に全て受け継がれる事になっていた。つまりその子を母親の実家である桐谷家で引き取る事によって達彦の遺産の全てが桐谷家に転がってくる事になるのだ。だがもう一つの理由として、その子……まだ1歳になったばかりの石路 桃香を誰が引き取って育てるかという問題があった。

本来であれば母方の祖父母である当主の桐谷 権三郎と淑子が引き取れば一番丸く収まりそうだが、石路家の遺産が転がる以上、桃香そのものには全く興味はないが、石路家の遺産だけは欲しいと思う虚け者達が醜い争いを繰り広げていたのである。

当主権三郎と淑子の長男で、今年38歳になる康一郎とその妻で35歳の綾音は、来年中学受験を迎える長男の康史を有名な超一流の私立の中高一貫校に裏口で入れるための寄付金を確保するために金がどうしても必要だった。だから桃香なんぞ本当は引き取りたくもないが、石路家の遺産は非常に魅力的だった。

同じように今年35歳になる次男の司も桐谷グループの傘下として自らが経営する会社の資産状況が芳しくなく、父親にしょっちゅう泣きついて資金を調達することで、ギリギリ自転車操業で切り抜けているような万年赤字経営だったので、康一郎と同じように彼も金が必要としていた。しかし彼は独身な上に子ども嫌いだったので当然桃香を引き取ってまともに育て上げる気などさらさら無かった。27歳の次女小依とその夫で30歳の皆川 大毅に至ってはただ単に遊ぶ金欲しさの為に遺産を狙っていた。無論二人とも子育て？何それ？な状態である。

そんな息子娘たち夫婦が揃って、当の桜の気持ちを見捨て、五者五様に自分勝手な主張をぶつけ合いながら馬鹿馬鹿しく醜い争いを繰り広げる様を見て、今年62歳になる淑子は溜息をついていた。淑子自身は自分の末っ子が忘れ形見である孫娘の桜を自分と権三郎の元で引き取りたいと考えていた。そして一度は桃香を引き取ると言言をしたのだが……。

「何言っているんだよ！お母さん。お父さんとお母さんも歳なんだから！しかも桃香はまだ1歳の赤ん坊だ。その歳でまた一から子育てするなんて大変だろう？お前らもそう思うよなあ？司、小依？」と、康一郎が口火を切ると、

「兄さんの言うとおりだよ。母さん。桃香ちゃんは僕が責任をもつて面倒を見るから……。」
と司が兄の言葉に便乗し、それを受けて、

「独身で子供の居ない司兄さんに子育てなんて出来る訳が無いでしょう？桃香ちゃんわたし達が引き取らせて頂きますわ。」

と、小依が申し出た。

「お前ら夫婦だつて子供が居ないだろうが！その理屈なら桃香は我が家で引き取つたほうが一番良いだろう。幸い康文も弟か妹が欲しいと言っているし、俺も綾音も今度子供が出来るなら女の子が欲しいなつて思つていたところだしな。なあ、お前？」

と、康一郎が声を上げると、

「ええ。だからぜひ引き取れるなら、桃香ちゃんを私達の娘として育ててみたいのよ。」

と、綾音の方も夫の言葉に同調した。

しかし、それを聞くや否や、

「嘘つけ！お義兄さんもお義姉さんも、康文君を裏口入学させる軍資金が欲しいだけじゃないか！！」

と、大毅が大声を上げると、

「五月蠅い！黙れ！ただ単に遊ぶ金が欲しい奴に言われたかねえ！
！引つ込んでいろ！」

と、康一郎も応戦した。

「いい加減になさい、お前達……。」

と呟くと、葬式の最中なのにも関わらず大乱闘を催そうとする子供たちを呆れ半分諦め半分で眺めながら、あまりの情けなさに淑子は自分の蟀谷に手を当てて俯いた。

ほぼ同時刻、親族たちが肉弾戦をおつ始めた和室とは別の、この家で数少ない洋間の一つである応接間で、3人の人物がテーブルを挟み、ソファ―に座つて話し合いをしていた。

あまりの衝撃発言に信じられず、

「本気ですか？！お義兄さん！お義姉さん！」

と叫んで、23歳になる石路 孝彦は目の前の、二人掛けのソファ―に仲良く腰を掛ける義姉夫婦、特に夫の方へ向かつて真意を問うように視線を向けた。

その視線に應えるように30歳になった桐谷 雅彬は隣に座る3

2歳になる妻の桐谷 紫苑と目配せを交わした後、孝彦の目を真直ぐ見つめて大きく頷くところ言った。

「ああ、そのつもりだよ。紫苑ともよく話し合った上での結論だ。私達が桃香ちゃんを引き取って育てたいと思う。」

「しかし、お義姉さんは兎も角、桜はお義兄さんとは何の血縁関係もない子供なんですよ?」

「大した問題じゃないさ。世間では、実子だと思っていいたら実は嫁が他所で作ってきた他人の子供だった、なんていう事も結構ある。大切なのは血ではなく心の絆だ。そうだろう?」

「で……でも、お義兄さんもお義姉さんも、お祖父さんお祖母さん……、桐谷家の本家で育てた方が桃香にとって良い、とあんなに仰っていたじゃないですか!何で今になって急に……?」

「あ……、孝彦くん。誤解の無いように言っておくが、僕らは別に達彦くんの遺産など興味も無いし、必要ともしていない。別にそんなお金が無くても私達は特に生活に困ってないしね。桃香ちゃんが家に来て家族が一人増えたところで厄介に思うこともない。むしろ、僕ら夫婦には子供が居ないから桃香ちゃんが来てくれる事が嬉しいんだ。」

「そうかも知れませんが、やはり御当主に引き取って頂いたほうが上手く行くんじゃないんですか?」

「僕も今日までそう考えていたんだが……、君も見ただろう?あの様子じゃ僕らが何言っても仕方ないだろうし、お義母さん一人がお義兄さんや小依ちゃん達を説得するのは難しそうだったからねえ。」

現に、丁度今、交渉が決裂したらしいからね……。」

「決裂って……。」

「孝彦くん、君にも聞こえるだろう……。丸く収まった話し合いであんなにドツタンバツタン騒ぐと思うかい?」

と、さつきから大騒ぎする音が聞こえる向こうの控え室の方へ顎を向けながら雅彬は苦笑して皮肉った。

そんな雅彬を見て孝彦は不安に駆られながら、雅彬と紫苑の方へ

こう尋ねた。

「でも、お義兄さん達が桃香を引き取るなんて事になったら、この家でのあなた達の立場が益々悪くなりませんか？」

「なるだろうね、多分……。主に僕の立場が……。だが……。」

「そんな事言わないで、あなた。心配してくれてありがとう、孝彦くん。でも、心配しなくても大丈夫よ。」

「そうそう、私達はいくまで桃香ちゃんを引き取りたいのであって、遺産を受け取る権利に興味もないし欲しくないからね。孝彦くんとお義母さん達には申し訳ないと思うが、桃香ちゃんと一緒に一旦遺産を受け取る権利を得た後、すぐにお義兄さん達に引き渡すつもりだ。それで、仲良く遺産を分割してくれば良いと考えている。むしろ連中にとっては、ある意味厄介払いが出来るんだ。感謝されこそすれ、これ以上連中から蔑まされる事もないだろうさ。」

そう呟く雅彬の姿は、この家での雅彬の扱いをよく知る孝彦から見ると、とても寂しいものを感じた。

雅彬は旧姓を藤原といい、京都市の出身で大阪の私立の男子校の進学校である高校を卒業した後、一浪して中国地方の国立大学の農学部へ進学、そこでも1年留年して卒業し、広島市の中規模な食品会社に就職して技術開発の研究者として勤務していたとき、その会社の取引先で、たまたま本社から出向して見学に来ていた桐谷紫苑と出会って付き合うようになり、結局入婿という形で結婚し、妻が社長として経営する食品・化学関係の会社を専務兼開発部長として支えている、経歴だけで見れば典型的なダメな人であり。孝彦も兄嫁を通じて初めて雅彬に出会った頃は、人が善さそうな性格だがダメな大人というか……。パツとしない人だなあ、というのが第一印象であった。事実今もそうだが、雅彬は妻の紫苑に名実ともに食わせて貰っているような状況なので、紫苑の兄弟たちから『ヒモ』のようだと馬鹿にされ、桐谷家の資産目当てで結婚したのではないかと訝しく思われ、今日まで夫婦そろって散々な扱いを受けてきた

のである。

だが、当主の権三郎とその妻の淑子だけは雅彬を少しとはいえ何故か評価していた。孝彦も雅彬と仕事などで付き合っている内に段々とその理由が分かってきた。

雅彬は、普段は無気力でヤル気がないただのオッサンだが、好きな事や自分の専門分野には嬉々として仕事をこなし、細かいところまでとことん拘る技術屋肌の男であった。特に専門である酵素開発と発酵技術には会社内でも定評があった。さらに彼は、彼自身は斜に構えているだけだと言っているが、しょっちゅう他の人とは違う視点からの発想で奇抜で斬新な事をいろいろやって成功させていた。それに彼はいい意味でも悪い意味でもオタクでマニアックであり、プライベートでは車の収集や改造に、エロゲやアニメのグッズ収集や腕時計なども集めているコレクター色が強いオタクであり、仕事でも自身が開発した乳酸菌発酵の健康飲料を愛飲するヒロインがいるエロゲが出来るという噂を聞けばそのゲームを出すエロゲメーカーと単独交渉し、そのゲームの初回特典として、そのヒロインがパッケージに印刷されたその健康飲料を紛れ込ませたり、そのゲームのヒロインを会社のマスコットの一人として起用したり、果てはそのエロゲがヒットしてアニメ化されることになった時、真っ先に製作委員会のスポンサーとして名乗りを上げた拳句、そのアニメの制作会社と放映するTV局に依頼して、アニメバージョンのヒロインにその健康飲料の宣伝をさせるというアニメCMを造らせてアニメのAパートとBパートの間に流させるということまでやってのけ、見事萌えオタという新規顧客を開拓してみせたのである。

しかも彼のすごいところは、ゲームやアニメとタイアップしての商品開発はもちろん。自分とこの商品のCM動画を某動画サイトに上げたり、某巨大掲示板に会社公式の『お客様の御意見募集スレ』というのを作ったりして、匿名で多くの利用者から要望や不満、意見を受け入れ、それを参考にすることでより良い商品を開発し続け

ているのである。

その多くがマニアとかオタクとかニツチな方面に向かつて商品が投入されているため、一般客を相手にするより新規に顧客を開発することは厳しいが、一旦新規顧客となった客はそのまま固定客として、どんなに高いものでもスペックがよければ購入してくるので、売上は少なくとも彼ら夫妻の会社の利益率は他の桐谷グループ傘下の企業と比べて異常に突出して高かったので、それだけに売上が多くても原価割れして自転車操業やコスト削減を常に迫られている会社、特に司や康一郎が経営するような会社からは妬み嫉みの対象ともなっていた。

だから常に彼らは、桐谷家のほかの兄妹、康一郎と司と小依から些細なことから言われもないことまで、何かと理由をつけられては激しいバッシングに遭っていた。普通だったらそのまま夫婦関係が終わっていても不思議ではなかったが、未だに彼ら夫婦が仲良く暮らしているのは恐らく彼らが超人レベルの忍耐力を持っていた事と、当主夫妻の他に雅と達彦が唯一味方として支えていたという事に他ならない。

だが、雅彬も紫苑も他の兄妹と何時までもギスギスとした関係をこれ以上続けたくはないのだろう。殆ど唯一の力強い味方だった義妹夫婦が逝った今、彼らの娘を引き取って同時に遺産を受け取る権利を他の兄妹に丸投げすることで、自分達だけが厄介者を引き受けるという損な役回りをする事で関係を修復したいという思惑もあったのかも知れない。

真意はどうであれ、雅彬と紫苑が桃香を引き取ると言う以上、本当に自分達の娘としてきちんと育て上げるつもりなのだろう。兄を通じて彼らと逢ってそんなに間がないとはいえ、少なくともそういう事にかけては信頼のおける人だという事は十分に分かっているの

で、孝彦は姪のことをこの人達に託す事にした。

「……そういう事なら分かりました。お義兄さん、お義姉さん。桃香の事、どうか宜しくお願いします。」

そう言つて、孝彦は雅彬と紫苑に頭を下げた。

「顔を上げてくれ、孝彦くん。桃香ちゃんを引き取らせてくれるようにお願いするのは私達の方だ。」

「妹の代わりが勤まるか自身はないけど、桃香ちゃんが少しでも辛い思いをしないように、わたしも頑張るわ。」

「じゃあ、それなら私達も控え室の方へ戻ろうか。お義母さんやお義父さんを説得しなければならぬし、お義兄さんや小依ちゃん達にも納得してもらわなきゃならぬ。」

その後の説得は、少なくとも雅彬が想像した以上には上手くいったと彼は感じた。

彼自身は義母を説得する自信は希薄だったが、淑子自身は雅彬と紫苑の事を基本的に信頼していたし、彼らが石路 達彦の遺産狙いではなく、信頼していた義妹夫婦の忘れ形見を自分達の娘としてきちんと育てるつもりであることは判っていたので彼らに桃香を託す事にした。だが、遺産を受け取る権利を他の兄妹へ完全に丸投げする事には同意することは出来なかった。

一方、康一郎夫妻と司と小依夫婦は、当初今の今まで何処かへ行つていた雅彬と紫苑が、孝彦と一緒に乗り込んできたかと思つた途端、いきなり開口一番に桃香を引き取ると宣言した事にすぐに猛反発したが、

「桃香を家で引き取りたいが、私達は達彦さんと雅ちゃんの遺産まではいらない。遺産を受け取る権利はお義兄さんと小依ちゃん達に譲渡するつもりです。」

と、雅彬が遺産の受け取りを拒否したので、内心でこいつは馬鹿かと嗤いつつも、厄介者を抱かえること無く金を手にできる、と心の

中で大喜びしていた。

だが、遺産を雅彬が全て放棄することに納得できない淑子が反対したのでやはり話は丸くは収まらないように思われた。

すると雅彬は淑子に向かって、

「お義母様、達彦さんと雅ちゃんのお義母様の遺産のうち少しでも私達が頂けば、残りをお義兄さん達にさし上げて構わないんですね？」
と質問した。すると淑子は渋りながらも、

「ええ、まあ、いいでしょう。」

と返答すると、

「なら、達彦さんと雅ちゃんが桃香ちゃんのために取り揃えていたベビー用品一式や子供服を私達に頂けませんか。僕らには子供が居ないのでそういう物が家に一切ないんですよ。さすがにこれから赤ちゃんが来るのにそういう物が無いというのは話にならないし、そうかといって新しく買うのは面倒な上に、二人とも勝手というものがよく解らない。第一達彦さんと雅ちゃんが用意して桃香ちゃんが使っている物が既にあるのなら、そちらを使うほうが桃香ちゃんにとっても良いと思うんです。後は特に私達には必要だとも思いませんから、康一郎お義兄さんと司お義兄さんと小依ちゃん、仲良く分けちゃって下さい。それならお義母様も御納得して頂けますよね？いい加減、こういう時にこんな野暮な事で言い争うのは止めにしてませんか？今は故人の冥福を祈るべきでしょう。そろそろ焼香が始まる時間ですから。皆さん行きましょう。」

と、半ば強引に話を終わらせ、葬儀へ出席するように皆を促した。

本家から火葬場に向かうために助手席に乗り込んだ紫苑と共に愛車のシルバーメタリックのJZX100マーク？のツアラーVの運転席に乗り込んだ雅彬は、シートベルトをしてエンジンを掛ける前に、乾いた涙がこびりついて曇ってしまった眼鏡を外すと、ポケットの中に手をつ突っ込んでハンカチを出し、殆ど30cmちよつとし

かまともに見えない視界の中で、目の近くまでレンズを持ってきて、
「はあ　っ。」

と息を吹きかけながら必死になってハンカチで眼鏡のレンズを拭いていた。

「ああ、駄目だ……こりゃ。取れないわ。」

「あなた、泣いているの？」

と、夫の様子を心配して紫苑が聞くと、

「ああ、少しな。でも大丈夫だ。じゃあ、そろそろ行くっか。火葬場までの道ってわかるよな？」

と、雅彬は、紫苑から見れば明らかに強がりつつ、車のエンジンを掛けてDレンジに入れてサイドブレーキを下ろすと、2台の霊柩車を先頭とする車列に付いて走りだした。

「そう言えば紫苑。桃香ちゃんはどうしたんだ？」

「桃香ちゃんならお母さんが一緒に連れて行くって。」

「そうか……。」

火葬場に行く途上、信号待ちで停車していると、フロントガラスの上の端ギリギリの所にある空に、ジェット機が機体の後方に二筋の飛行機雲を残しながら飛び去るのを見た途端、何故か雅彬は涙を堪える事が出来なくなった。

慌てたようにまたハンカチを出して、眼鏡をずらしながら目元にハンカチを当てている夫を見た紫苑は思わず、

「あなた……、大丈夫？」

「すまん、やつぱ駄目だ……。飛行機を見る度に思い出してしまっ
っ。」

「気にしすぎよ……。あなたの所為なんかじゃないわ。仕方が無い事だったのよ。」

「いや、僕の所為だ。僕が冗談で達彦くんに桃香ちゃんの為にも少しでも早く帰って来てやれよだなんて言わなかったら……。せめて一つ遅い便に乗っていればあんな目に遭わなくて済んだと思うと、

遣り切れなくてな……。」

「起きてしまった事を嘆いてもしょうがないわ。あの二人の為にわたし達が桃香ちゃんを立派に育て上げましょう。それが二人に対する一番の供養よ。」

「ああ。だが雅ちゃんも達彦くんも辛かっただろうなあ。こんな……、こんな幼い子を遺してあの世へ逝かなきゃならなかったなんてそれに桃香ちゃんも可哀想や。こんな小さいのにお父さんとお母さんが死んでしまったのだから……。」

「桜ちゃんのためにもわたし達があの子のお父さんお母さんに成ってあげましょう。」

「ああ……、そうだな。僕たちがあの娘の父親と母親になってやるう。」

信号が青になり、信号待ちで止まっていた車の列が動き始めた。

雅彬はハンカチで目尻に溜まった最後の涙をふき取ると、ハンカチをしまって眼鏡を掛け直して車を静かに発進させた。

そして、それから15年の月日が過ぎた。

第一話：暴かれた真実

今年16歳で高校2年生になった桃香と、彼女の母親で48歳の紫苑は、彼女の高校の修学旅行が西欧圏の国々の幾つかの都市を巡るといふ行程に決まったので、未だに旅券と云う物を所持していなかった彼女の為に、夏休みという絶好の機会を活用し、パスポートを申請するのに必要となる書類を調達しに、住民票がある居住区の区役所へ訪れた。

当然の事ながら、国際的に通用する確固たる身分を証明する物である以上、パスポートの申請には、住所だけが記載された住民票の他に、本籍地から性別や生年月日、果ては血縁関係から結婚歴に至るまで、その人の来歴が細かく記述された戸籍謄本と云う物を役所から取り寄せなければならぬ。

無論、日本国籍を持つ歴とした日本人である以上、桃香だって戸籍謄本くらいは持っているし、必要があれば何時でも手に入れて見る事も可能だ。そして、こういう時位しか目を通さない代物である故に、たとえある程度は自分で把握しているにせよ、アイデンティティの再認識という意味で彼女が自分の戸籍謄本の記載内容に純粋に興味を持ったのも仕方がない事だった。

時に桃香は、仲の良い友人から、戸籍謄本の本籍地は自分の好きな所へ勝手に変えられて、そして大抵はその人の両親によつて勝手に決められていると聞き、一体両親は自分の本籍地を何処だと申請したのか気になっていたのである。

ところが、紫苑は窓口の係の人から住民票の写しと戸籍謄本を受け取ると、目にも留まらぬ早業でそれらを二つ折りにし、桃香に見えないように黒色のクリアフォルダーに入れてハンドバッグの中へ突っ込んでしまった。

桃香は、そんな母親の不審な行動に心の奥底でモヤモヤとした、まるで凝りの如く据わりの悪い不鮮明で不定形な感情を抱きつつも、楽しみにしていただけに灰掛かった憂いに満ちた深い溜息を吐いて、がっくりと肩を落とした。

そして一方、鮮やかな手捌きで書類を鞆へ仕舞い込んだ紫苑は、桃香が本当は自分達の実の子供ではなく、彼女の本当の両親が既に不帰の客である事がはっきりと明記された戸籍謄本の内容を当の本人に知られなかった事に、娘とは対照的に赤味が差した温かい一息を吐いた。

そうして、一先ず秘密は無事に守られたかのように思われた。

事態が急変したのは、数日後、最寄りの外務省事務所の申請窓口へ必要書類を提出する時だった。

紫苑自身は十分注意した心算ではあったが、申請書に戸籍謄本の本籍地等を記入する時、うっかり桃香の目の届く所に戸籍謄本を広げてしまった。

当たり前だが、ずっと隙を窺っていた桃香はこの時を見逃さなかった。たった1分程度の間だったが、ペラペラの紙に書かれた文字を隅々まで舐め回すように母親の右側から覗き込んだ。

最初、真っ先に見つけた本籍地が、母方の祖父母の屋敷、桐谷本家邸である事を初めて知って、

「へえ、そうだったんだ……！」

と感心して、今まで知るチャンスが無かった自分自身の様々な事実に興味を持って読んでいたが、ある項目へ視線を移した途端、彼女の頭の中は真っ白になった。

『家族：桐谷 雅彬（養父）・桐谷 紫苑（養母）』

え？何これ？どついう事？

巨大なハンマーで頭を強打されたかと思う程、目の前で唐突に突き付けられた衝撃的な事実には慄いたあまり、咄嗟に桃香は左隣にいる母親の顔を凝視した。

何かの間違いだと思っただが、やはり家族欄には、自分がこれまで実の両親だと信じていた人達と自分自身に直接的な血の繋がりが無い、と断言されている。

そして、その下には備考欄としてこう書き込まれていた。

『その他の血縁者：石路 達彦（備考：実父・亡）・石路 雅（備考：実母・同左）』

今度こそ、桃香は目の前が真っ白になった。

社員が全員帰った後、雅彬はオフィスの見回りをした後戸締りを確認してタイムカードをパスし、電気を消してから入り口の扉を施錠すると、階下の駐車場に降りてから車に乗って帰宅する為に、エレベーターホールでエレベーターが来るのを待っていた。

彼が今いる場所は、都内の一等地の中でも麻生の一丁目という、不動産の価値には疎い雅彬でも地価がべらぼうに高いとわかる、オフィス街に一際高く聳え立つ、桐谷家当主の権三郎が所有する110階建て桐谷グループの本社ビルの26階にあるオフィスだった。

桐谷グループの本社ビルには、グループの中核をなす、権三郎が会長職を務める桐谷ホールディングズを始めとしたグループの系列に連なる殆どの企業がこのビルの中に本社のオフィスなり事業所をこのビルの中に設けていた。

ただ、1フロア辺りの面積が広いとはいえ、他の企業が3〜5フロアを占拠しているにも関わらず雅彬と紫苑の会社のオフィスはこのフロアだけであった。そういう点でも、萌えキャラをマスコミとして起用してキモオタ相手に商売をしている点でも、桐谷発酵素開発は他の企業から見下されがちな会社である。

しかし、彼自身はそうした中傷に耳を貸すつもりは毛頭も無かつたし、本社が小さいとはいえ、権三郎に対して面目を少しでも立てるために一応ここにオフィスを構えて本社と銘打っているが、実際に本社として機能しているのは秋葉原にある支社の方であり、この他にも名古屋、大阪、広島、福岡、仙台、札幌にそれぞれ小さいながらも事業所や研究所があり、郊外に自社工場も完備した上で、基本的にアマゾンや楽天といった通販サイトと提携して、売上の殆どをネット通販に依存していたので、会社の営業形態の割には、まあ大きな方かなとも思っていたし、彼自身が自他共に認めるオタクだったので、外野の誹謗中傷くらい正直どうでも良かったのである。

ただ、それでもこのビルを彷徨すれば必然的に出会うことになる二人の義兄と義弟と顔を合わすたびに、自分や家族に対して罵詈雑言をふっかけてくる3人に対し、ムカつく以上にどこか申し訳なくなっているたまれなくなってしまうていた。

別に彼の所為というわけでもないのだが、彼自身は義兄弟の3人とその家族の人生を間接的に滅茶苦茶にしてしまったと責任を感じて生きてきたのである。

15年前、義妹夫婦の葬式で娘の桃香が相続するはずだった義弟の遺産を巡って彼らが争っていた時、義妹夫婦の桃香に遺したベビ用品や子供服と一年分しかないアルバムと共に雅彬が桃香を引き取り、残りを義兄妹の家族で山分けさせる事で一旦は決着したかに思われた。が、今度は誰がどれだけ遺産を貰うのかという取り分で実の兄妹同士で大喧嘩になってしまった。

結局康一郎は裏口に必要な資金を集められず康文の中学入試の結果は惨敗。康文は公立中学へ行ったが、従来のプライドが邪魔して学校に馴染めずにくぐ不登校になって、今は部屋に引き籠って、もう27になるのにニートのような生活を送っているらしい。

司の会社は、取り分だけでは赤字を到底補えなかったもので、結局彼の父である権三郎が赤字分を補填して経営を建てなおさせる代わりに、司を取締役から外して彼を課長待遇まで降格させた。さらに悪いことに取締役時代、司はワンマン社長な上に社員に対して横暴で、セクハラやパワハラを日常的に行なっていたので、降格されるやいなやかなり長い間社員から辛辣な復讐を受ける羽目になった。小依と大毅は思っていたよりも取り分が少なく、すぐに使いきって生活が苦しくなったのを、未だに雅彬の所為だと事ある毎に吹聴していた。

本当にどれも考えなくても手前の自業自得だとわかる逆恨みだらけだったが、自分達が桜だけを引き取って遺産を放棄すれば若干ながらも義兄妹との関係がマシになるのではないかと期待していただけに、むしろ以前より悪くなっているような今の状況は彼にとって少々凹む現実だった。

エレベーターで地下3階の駐車場に降りて駐車スペースに停めていたシルバーマタリックの200クラウンのアスリートに乗りこみエンジンを掛ける。

エンジンが始動した途端、今朝車のエンジンを切るまではウォークマンに入れたアニソンが鳴っていたのに、オーディオがまた設定を勝手にTVに変更したのか、カーナビの画面に地デジの映像が映っている。このビルには携帯電話のそれと一緒に地デジの中継アンテナが設置されているので、地階にも関わらずテレビを視聴する事が可能なのだ。

雅彬は、やれやれまたかと思いつつもテレビを切つてオーディオをプレイヤーに切り替えようと手を伸ばした。しかしながらその刹那、目に飛び込んできたあるテレビのテロップの所為ですぐに彼は手を引っ込めざるを得なくなった。

『あれから早15年…日本航空1130便ハイジャックテロ墜落事件……激録!!番組独自取材で暴かれた新たな真相!』

そんなテロップが画面の右上にでかでかと表示されている。それを見た雅彬は誰に向けるわけでもなく、こう呟いた。

「そうか……、もうあれから15年も経つのか……。早いものだな。僕も歳を取るわけだ。」

日本航空1130便ハイジャックテロ墜落事件……。ドイツのフランクフルトから成田に向けて飛んでいた日航のジェット機が日本上空を飛行中に、突如現れた数人のテロリストが機内を占拠し、成田から国旗議事堂へ突っ込めと機長を脅迫して操縦桿を奪おうとしたが、機長や副操縦士の抵抗にあつて小競り合いをした際に誤ってテロリストが持っていた手榴弾が爆発し、そのまま静岡山中に墜落して320名の乗員乗客全員が死亡した痛ましい事件である。

それだけでも日本で起こったテロ未遂事件として多くの国民の記憶に残る事件となったが、それ以上に雅彬にとっては、1130便の乗客名簿の中に雅と達彦の夫婦の名前があつたという意味で忘れようにも忘れられない事件だった。

当時雅と達彦はデキ婚だった上に、結婚して桃香が生まれてすぐ達彦の父親だった石路コンチエルの前社長が突然心臓発作で倒れ、そのままその14年前に亡くなっていた達彦と孝彦の母親の元へ逝くかのように急逝し、達彦が社長に就任したり、雅も幼い桃香の世話に追われたりして忙しかったので、二人は結婚式を上げても新婚旅行に行く暇など毛頭も無かった。

そこで色々な事が落ち着いてきたある日、たまたま仕事で達彦に会った時に、

「達彦くん、君もお父さんの跡をついで社長になって大分落ち着い

てきたようだね。」

と、雅彬が言うと達彦は、

「ええ、最初はきつかったですが今は慣れてきました。それに董と桜がいるから、もうきついだなんて弱音、吐けませんからね！」と答えた。

「そうか。偉いな、達彦くんは……。ところで、雅ちゃんと桃香ちゃんも元気にしているかい？」

「ええ、お陰さまで……。そうそう、この間初めて桃香が僕の事をパパって呼んだんですよ！」

「そうか、もう1歳になるもんなあ。そうか、そうか。言葉を喋る事が出来るようになったのか。」

「ええ、今度お義兄さんもお義姉さんも見に来てやって下さいよ。ご馳走しますよ。雅もお義姉さんに逢いたがっているし喜ぶと思います。」

「そりゃあいいな、今度時間が出来たら紫苑と二人で桃香ちゃんに会いにお邪魔させてもらうよ。」

「是非いらして下さい。」

「ところで、達彦くん。君は雅ちゃんと……。その……。新婚旅行のようなものに行く気はないのかい？」

その場で思いついた単なる気まぐれだったが、雅彬は達彦に提案した。

「新婚旅行か……。行けたらいいな、とは思ってますけどね……。。」

「したいのか、したくないのか、達彦は雅彬に対してかなり歯切れの悪い態度を取った。

「なら、行って来れば？子供を持った事がないから何とも言えないが、そろそろ桃香ちゃんもそれ程手間がかかるようになった訳ではないだろう？お義母さんとお義父さんに桃香ちゃんを預けて、雅ちゃんと二人だけでゆっくり何処か旅行へ行行って来れば？」

「そうですね……。でも、やっぱり桃香を放って置くのはちょっと

……。」

やはり幼児がいる事が、達彦が二の足を踏む大きな要因となっているようだ、と雅彦は感じ、義弟の背中を押してやるうと考えた。

「お義父さんとお義母さんなら大丈夫だろう。先日もそちらに伺った位、二人とも桃香ちゃんにメロメロじゃそうじゃないか。それに何かあったら僕達もフォロースするから心配しないで行って来い！こういうのは行ける時に行っておいた方がいい。」

「そこまで言うなら……、今度休みを取れた時に雅を誘ってみます。」

「おう、行って来い。行って来い。」

良い笑顔を見せた達彦を見て上機嫌になった雅彬は、饑別の心算で義弟の背中を力強くパンパンと叩いた。

そしてそれからしばらく経ち、何とか休みを作った達彦は雅を連れ、ドイツとフランスとイタリアの三カ国を1週間かけて巡る、少し遅めの新婚旅行へ旅だった。

その間、雅彬と紫苑はほぼ交代で何かと理由をつけて本家へ訪ね、毎晩のように達彦や雅と国際電話で連絡をとりながら、その日その日の桃香の様子を逐一報告して二人を安心させ、また二人からその日あった旅行中の話を聞いてしばしの歓談を楽しんだ。

あれは、予定では達彦達がドイツから帰国するはずだった二日前の深夜の事だった。その日電話を取った雅彬は電話の向こうの達彦から、ある秘密の計画を持ち掛けられた。

「お義兄さん、僕達、帰国する予定の便を一つ早めて帰ろうと思うんです。」

「……？別にいいけど、どうして？折角の旅行なのだから、もっとゆっくりしていてもいいんだぜ。こっちは大丈夫なんだから。」

怪訝に思っただ雅彬がそう言つと、受話器の向こうから悪戯っぽい笑い声を上げる達彦の声が聞こえて来た。

「そうかも知れませんが……、予定よりも早く帰ってお義父さん、お義母さん、桃香や皆を吃驚させてやろうと思って。だからお義姉さんにも黙っていて下さいよ。」

ほう、何か面白そうだな……。達彦の計画を耳にしてそう思った雅彬は、それに乗る事に決めた。

「成程……。それは少し楽しそうだな。わかった、紫苑にも黙っておくよ。そうだ、それなら帰国する便の名前と到着時刻を教えてくださいませんか？成田まで車を出して迎えに行くよ。」

「そう言ってくれると思ってお義兄さんだけにはお話することになりました。」

雅彬は、受話器の向こう側でにやにや笑っているだろう義弟の姿をありありと想像したが、不思議と悪い感じがせず、全く不愉快だとは思えなかった。

「こいつめ……。わかったから便と時間だけ教えてくれ。」

「こつちを明日の夜の9時半に経つJALの1130便で帰ります。到着するのは明後日の夜の10時40分になってしまつのですが…

…。」

「ルフトハンザじゃなくてJALで帰るのか？」

「そこしか取れなかつたんですよ……。」

「そうか……。わかった。仕事が終わってから迎えに行くよ。」

「お願いします。あと毎度夜分にすみません。」

「気にするなよ。じゃあお休み。」

こうして本来この晩から数えて三日後の朝に帰国する予定だったのを強引に半日早めて翌々日の夜に到着する予定に変えたのである。

そして、二人がドイツから帰国するはずだった日の22時、愛車のシルバーマタリックの147アリストを成田空港の駐車場に止めた雅彬は、少し早かったかなと思いつながら国際線の到着ロビーに向かって歩いていった。

達彦達のお願い通り、吃驚させてやろうと思っただけは紫苑にも予定が半日早まった事を話していなかった。その為この日の晩のために、適当にちよつとした接待をしなければいけないという架空の予定を捏ち上げて、達彦との約束通り紫苑には黙って、一人で義妹夫婦を迎えに来たのだった。

ところが、到着予定の時間を過ぎて23時を回っても、二人はロビーに姿を見せなかった。それどころかJAL1130便の乗客らしい人間が一人も出てこなかったのである。ひよつとしたら飛行機が何かの都合で遅れているのだろうか？……まあ、国際線の長距離便にはよくある話だ。

だが、23時半を回って到着予定時間を一時間以上過ぎても、飛行機が……、1130便が到着したというアナウンスは一切なされなかった。

その頃には、誰もが流石におかしいと思ひ始めたのか、自分と同じように1130便の乗客を迎えに来たらしい人達が、何かあったのだろうか？とざわつき始めていた。

雅彬は側にいた50位の男性に話しかけられた。

「何か、あつたんでしょうか？」

「ええ。おかしいですね。もう一時間以上前に着いている筈なのですが……。」

「あなたも、1130便に乗っている方を迎に来られたんですか？」

「ええ。義弟と義妹がこの飛行機で帰国する予定だったので……。」

「わたしも……、ドイツ人の古い友人がこの飛行機で来るので迎に来たんですが……。一体どうしてしまつたんでしょうね？」

気のせいか、空港全体が騒がしくなっているように感じて雅彬は物凄く不安になった。

取り敢えずこのままじゃ埒があかないと、さっきの男性を始め、迎えに来ていた人達十数人と共に、空港の中のJALのサービスカウンターに行くと、カウンターは1130便の事を尋ねているらしい乗客を迎えに来た人間と、その対応をする受付の中のJAL社員が、何か言い争っているのか知らぬが、かなりの喧騒になっていた。目の前の年若いJALの女性社員の胸倉を掴んだ初老の男性が叫んでいる。

「だから、1130便は一体今どこで何をやっているんだ?!」

受付で応対する社員が悲鳴を上げる。

「い、今確認を取っているところですから、も……、もうしばらくお待ち下さい!」

「お待ちください、お待ちくださいって。こっちはそれ言われながら30分も待つているんだぞ!いつになったら1130便の消息はどうなっているんだ?まだ解らないのか?!」

それを聞いた雅彬は、言い知れぬ嫌な予感を感じて居ても立ってもいられなくなり、初老の男性の前に立って社員に噛み付いた。

「ちよつと待て!飛行機の話がわからないってどういう事なんだ?!何か事故があったのか?」

「ですから、今……、社を上げて全力で調査をしていますから……。皆さん落ち着いて……。」

あまりのJAL社員の態度に怒り心頭に達した雅彬は、人目も憚らずに絶叫した。

「落ち着いていられるわけないだろ!飛んでいる飛行機の位置くらいなら管制塔のレーダーですぐ確認できるだろ?頼む。正直に言うてくれ!今一体どういう状況なんだ?」

「そ……、それは……。」

「こっちはその飛行機に身内や知り合いが乗っているんだよ!頼む。教えてくれ!今一体どういう状況になっているんだ?」

「そっだ!どうなってるんだ?」

「みんなは無事なの？」

迎えに来た人達が口々に叫ぶのに耐えられなかったのか、その社員はやっと重い口を開いた。

「1130便が……、静岡県上空で……、レーダーから機影が消えました……。」

その瞬間不安が絶望に変わった。

結局翌日の未明、静岡県の山中で殆ど機首が判別出来ないくらいペッシャンコなってバラバラになり、夜空を赤く染め上げる程に物凄い豪炎に包まれた1130便の無残な残骸が発見された。

地元や近隣の消防団や消防署の消防隊が何十隊も集結して懸命の消火活動で火災が沈下した後、レスキュー隊や自衛隊による救助活動によって助けだされた遺体は、一番現場から近い所にあった小学校の講堂の床の上に並べられ、身内や知り合いの遺体を確認するために、遺族が、友人が……、遺体の周りを目的の人を求めて生気が抜けた亡霊のように彷徨していた。

そんな中、やつとの想いで雅彬は、偶然にも二人仲良く並んで横たわっていた雅と達彦の遺骸を発見した。

最初、その遺体を見たとき、雅彬はそれが本当に人の死体なのか解らなかった。それは死体というよりもボロボロになった人型の黒い炭だった。もちろん服は全て燃え尽きて殆ど裸のような状態だったし、顔の判別はおろか男女の区別さえ不可能だった。

そんな状態でも、達彦の遺体の左手首に巻き付いていた、彼が彼の父親から貰って始終大切にしていた金色のロレックスの腕時計と雅の遺体の首に掛けられた、以前雅の誕生日にプレゼントとして雅彬と紫苑が送った見覚えのある董色のアメジストの石が付いたシルバーチエーンのネックレスが、雅彬にそれが二人の遺体であると教えてくれた。

墜落時の衝撃と熱に耐えられなかったのだろう、腕時計も首飾りも溶解し、ロレックスに至っては墜落した時間を差したまま針が止まっていた。そしてこの2つの事故の記憶は、二人が最後の瞬間まで身につけていた遺品として、彼の書斎の机の中に15年経った今でも、いつか来るであろう桃香に二人の話をする時の為に大切に保管してある。

15年前のあの時にはただの不可解な航空機の墜落事故として片付けられていたあの事故も、10年前に航空機に付けられていたブックボックスの解析によって、航空機を占拠したテロリスト達によって引き起こされたものだと言及した途端、毎年この時期になるとマスコミが面白おかしく報じているのだ。

信号待ちで止まったのでサイドブレーキを掛け、ナビの画面が地図からTVに切り替わると、墜落現場後に造られた慰霊塔に祈りを捧げに来た遺族たちの映像が映っていた。そう言えば今年は仕事が忙しくて慰霊祭に参加することが出来なかった。今度盆に墓参りをする時にでも二人に謝っておこう。

結局事故の後、二人の葬儀を終えて桃香を引きとってから今日まで、雅彬と紫苑は彼女に自分達こそ本当の両親だといいい聞かせ、彦と雅の存在は極力隠して育ててきた。

一つは、桃香の記憶に残っていない二人の存在を自分達夫婦が話す事によって、彼女が自分達夫婦と精神的な距離や、本当の親子じゃないと意識する事によって生じるある種の疎外感と寂しさを感じない為に。

もう一つは、桃香の母方の親戚達が、彼女が本来受け継ぐはずだった遺産を全て使い果たしてしまったという事実を彼女に知られない為に。

前者の理由は彼と彼の妻が娘を引き取るときに話しあって決めた

事だが、後者の理由は、その遺産を使い果たした張本人の、妻の兄弟たちから押し付けられた事である。

勿論、雅彬だって何時迄も桃香に達彦と雅の事を隠しきれるとは思っていない。何時か話さなければならぬと考えてはいる。

だが……、まだその時ではない、と話さなければならぬと考える度に雅彬はそう思ってしまうのである。何故だか解らないが、話してしまうと取り返しのつかないことになりそうに怖いのだ。

車を駐車場に止めてから世田谷にある自宅まで徒歩で向かい、玄関のドアを開けて妻も娘も家にいることを玄関にある靴で確かめてからチェーンロックをして施錠し、廊下を通ってリビングに入るとちょうどキッチンで夕食の準備をしていた紫苑の姿が目に入った。

「ただいま。」

「あら、お帰りなさい。案外早かったのね？」

「最終確認の打ち合わせだけやったからな。思ったより早く帰れたよ。」

「もうすぐ夕食もできるけど……、先にお風呂に入る？」

「いや、飯にするよ。腹ペコだ。」

そうして雅彬は、一旦自分の書斎に行き、スーツからカジュアルな普段着に着替えると、リビングのテーブルの側、テレビの近くに置かれているソファアーにどかと座って、テーブルの上のリモコンに手を伸ばしてテレビを付けた。

たまたま雅彬のナビと家のテレビが同じチャンネルを映していたのか、それとも今日はどの局も事故の特集をやっているのか、また事故現場と特集テロップが大画面のテレビに大映しになった。しかも今度は、

『その時、1130便で何が起こったのか!？』

と銘打って、事件が起きた時の機内の様子を、役者を使った再現映

像で流していた。

それを見てまた、

「もう15年も経つのか……。」

と呟くと、それに応えるかのように手を止めてリビングまで出てきた紫苑が、

「早いものですねえ……。もう15年も経つんですものねえ。」

「僕達も歳を取るわけだ。」

「桃香も16歳になりました。」

「そうか……。桃香も16歳か……。あと十年もすれば雅ちゃんと達彦くんは歳を追い越しちゃうのか……。なんか複雑だな……。ところで、桃香の奴は何処に行ったんだ？もうすぐ夕飯なのにあの娘がテレビの前に居ないなんて珍しい。」

「……。その事なんだけど……。ねえ、あなた。」

「なんだ？紫苑。」

「桃香に、そろそろ本当の事を話した方がいいと思うの……。」

「……。ああ、まあ……。でも、まだ少し早くないか？」

「……。実は、今日あの娘のパスポートを申請しに行った時に、あの娘、わたし達があの子の娘の実の両親じゃない事を知ってしまったの。」

「……。？……。っ！ええっ？！何だっ？！！」

雅彬はあまりの事に驚いて、ガバツと妻の方を振り返った。そんな夫の形相を見ながら、紫苑は恐る恐るもう一度繰り返す。

「だから……。その……。知ってしまったのよ……。」

「何で桃香のパスポートを申請しに行ったんだ？！」

「え？そっち？」

予想外の雅彬の反応に、紫苑は不覚にも心の中で盛大にずっこけてしまった。

「すまん、冗談だ。そうか……。知っちゃったのか。」

そう言っただけはソファに思い切り深く座り込むと、雅彬は深々と溜息を吐いた。

「で、今桃香はどうしているんだ？」

「やっぱり、シヨックを受けているのでしょうか……。帰ってから、トイレに行く以外はずっと部屋に閉じこもっているわ。」

雅彬は、憂いて思い悩むようにその口にする妻の横顔が、とても暗くて悲しい物に感じて、思わず目を伏せた。そして、何か他に話題がないかと考えた。

「……そうか。それならばらくそつとおいた方がいいかも知れないな……。ところで、何でまたパスポートなんかが必要になっただんだ？」

「その、桃香からあなたには黙っていて欲しいと言われていたのだけど、今度学校の修学旅行で、あの娘、ヨーロッパに行くことになったのよ。」

「……………」

ヨーロッパと聞いた途端、雅彬の顔が厳しく強張った。そんな顔を見て夫の心情を察した紫苑は雅彬を諭すようにこう言った。

「ねえ、雅彬。あなたはあまりいい気はしないでしょうけれど、わたしは桃香を修学旅行へ行かせてやりたいのよ。だって高校生活で一度きりの大イベントなんですから。」

「うむ……………」
態々妻に言われなくても、雅彬だってその所はよく理解している。

「あなたの気持ちも解らないわけではないわ。でもわたしは、今はあの娘の気持ちを第一に考えてやりたいのよ。」

「いや、紫苑。僕だって好きで行かせたくないわけじゃないよ。出来るなら心置きなく行かせてやりたいと思うさ。」

「だったら……………」

「だけど、何も考えずに送り出して……。もしも…………、もしもあの娘があのように手が届かんくらい遠くへ逝ってしまったら…………。そう考えるとなあ…………。」

「……………」

紫苑は黙って夫の胸の内の告白に耳を傾けていた。

「まあ、なんだ。今はこの話題は保留させてくれないか……？今あの娘がああいう状態なら、とてもじゃないが修学旅行どころじゃないだろう。……そう言えばコンロの鍋大丈夫なのか？掛けっぱなしみたいだけど。」

「あ、いけない！」

と叫ぶと、紫苑は急いで火を消しにキッチンへ駆けていった。そして雅彬もソファから立ち上がって紫苑の後を追うようにキッチンへ入ると、

「もう夕飯が出来るんだろ？手伝うよ。」

と、言っただけで皿に盛られていく3人分の食事をテーブルに運んで並べていき、全て運び終わると、リビングから廊下へ出て行く扉を開けて部屋から出ていこうとしたので、

「あなた、どこへ行くの？」

と紫苑が問いかけると雅彬は、

「桃香を呼びに行く。」

と、平然と答えた。

「え、でも今桃香は……………」

さっき自分がそつとしておけと言っただけではないかと紫苑が不思議に思っていると、

「食事を摂らせないわけにはいかんだろ。それにあの娘が知ってしまった以上、僕はあの娘に話す…………、いや、話さなければいけない事がある。」

そう言うと雅彬はリビングから出て行った。

第二話：雅と達彦

リビングから廊下に出た雅彬は、階段を登って2階に上がって子供部屋の前に立つと、桜の部屋のドアを、コン、コンとノックすると、

「桃香、お父さんだ。入るぞ。」

と声を掛け、普段と違い娘が何の反応を返さないのを敢えて無視して、ドアを開けて娘の部屋の中に入った。

ピンクを基調にした女の子らしいその部屋は、もう夜の8時をとつくに回っているのにも関わらず電気もつけていないために真っ暗だったので、雅彬が手探りでスイッチを捜して蛍光灯を点けると、部屋の窓際に置かれた勉強机の前で机に肘を付き、両腕で頭を抱かえながら無言で座っているのが目に入った。

部屋に入った雅彬は、部屋のドアのすぐ正面にある桃香のベッドの縁に腰を下ろし、開いた太股の腕に両腕を載せて前かがみになると、彼女の方に顔を向け、

「もう、夕飯ができたぞ。食べに来なさい。」

と、努めてとはいえ優しく穏やかな口調で娘に語りかけた。

だが、桃香の方は雅彬の方を見るところか微動だにせず、

「……いない。」

と、抑揚のない蚊の鳴くような声で答えた。

「いない訳はないだろう。お腹が空いているんじゃないのか？」

「……お腹空いてない。」

「食べなきゃ体に毒だぞ。」

「……食べたくない。」

雅彬は暫く黙りこむと、太股に肘をついたまま両腕を上げて手のひらを組み、その手の甲の上に顎を乗せると、再び桃香へ語り掛け

た。

「さつき、母さんから聞いたよ。お前がお父さんとお母さんの本当の子供じゃないと云う事を知ってしまったんだって？」

「……………」

「大人の勝手な事情のためとはいえ、お前には僕らこそ本当の両親だと言い続けて育ててきたんだ。お前がすごいショックを受けても仕方が無いと思う。」

「……………なんで、何で本当の事を話してくれなかったの？」

「そうだな……………。こうなるのだったらもつと早く話した方が善かったかも知れないな……………。お前の本当の両親が死んだ時、お前は未だ赤ん坊だった。だからお前に記憶にすら残っていない実の両親の話を下手に聞かせるより、僕達の子供として育てた方がいいと思ったんだ……………。だけど、どうやらお父さんとお母さんのエゴだったようだな……………」

「……………」

「桃香……………。取り敢えず階下に降りて一緒に夕飯を食べないか？夕飯の後にお父さん、お前の本当のお父さんとお母さんについて話さなければならぬことがあるから……………な？」

桃香はやはり黙って話を聞くだけだったが、初めて雅彬の方へ振り返り、背中合わせで座る父親の後ろ姿をまともに凝視した。そして、その視線を感じた彼も、自ずと彼女の方へ顔を向け、父娘はしつかりと向かい合った。

「じゃあ、お父さん待っているから。落ち着いてご飯が食べたくなったら何時でも降りて来なさい。」

そう口にする、雅彬は静かにベッドから立ち上がり、階下へ戻って行った。

桃香が夕飯を食べに階下に降りてリビングに入ると、雅彬と紫苑は食べ終わったのか、テーブルの上には桜の分の夕食がラップに包まれて置いてあるだけであり、二人の食器はキッチンのシンクの方

に片付けられていた。

桃香がリビングに入ってきたのに気がつく、紫苑は桜に話しかけた。

「桃香、ご飯を食べに来たのね……。ちょっと待ってね。今温め直すから。」

「いいよ、お母さん。このままでいい。」

そう答えると桃香は、父親がテレビを見ながらその上で釈迦の涅槃図のような体勢で寝転がっているソファの前で正座をし、食器に巻かれたサララップを外してその上に盛り付けられた食事を食べ始めた。

娘が自分の前に座って食事を摂り始めたのに気が付くと、雅彬はソファから起き上がり、リビングから続く自分の書斎に向かった。

書斎の蛍光灯を点けて中へ入ると、最初に雅彬はPCデスクに付いているコロ付きのドローの、三段あるうちの鍵がついた一番上の引き出しを開け、中から十センチ四方の紙製の蓋付きの小さな白い箱を手にとった。

次に彼は、専門書や専門誌、辞書や科学雑誌、ライトノベルや漫画や文庫本やCDやフィギュアなどが並べられた本棚の前に立ち、その中で一番目立たない所に仕舞われている、表紙が濃い青色をしている1冊の古いアルバムを取り出すと、その二つを持って書斎を出、桃香の隣、いつも雅彬が夕食を食べている位置に腰を下ろして胡座を掻いた。

雅彬は桃香に、まず何から話すべきか逡巡しながら暫く沈黙した後、やっとの思いで話し始めた。

「さて、何から話したらいいかわからんが……。お前の本当のお父さんとお母さんの話を話す前に……。桃香、お前。昔、『日航1130便ハイジャックテロ墜落事件』という事件、というか事故があ

った事を知っているか？今丁度ニュースで取り上げられているが……。」

丁度その時、夜のワイドショーで流していた事故の概要を説明するCGを指差しながら雅彬は訊ねた。

「うん、何となくなら……。昔あつたつて云う飛行機事故でしょう？」

「ああ、15年前の今時分に起こった、ドイツから日本の成田空港へ向かつて飛んでいたJALのジェット機が、日本上空で突然テロリストにハイジャックされて、テロリストのC4爆薬が使われた手榴弾が誤爆して、その所為で飛行機が空中分解して静岡県山中に墜落した忌々しい事故だ。」

「その事故がどうしたの？」

「うむ……。実は、その飛行機にお前の本当のお父さんとお母さんが乗っていたんだ……。」

そう言つて雅彬は傍らに置いていた先程の白い紙箱を取り出してテーブルの上に置き、桃香の目の前で蓋を開け、中の物を取り出した。

それは、何かものすごい熱にさらされたのだろうか……。グニャツて溶けてひしゃげた男物の金色の腕時計らしい物とチェーンが溶けてグシャグシャになった綺麗な薄紫のアメジストのシルバーのネックレスらしき物だった。

「お父さん、これ……？」

「この時計とネックレスはな、お前のお父さんとお母さんが死ぬ瞬間まで……。いや、遺体になってからも身につけていたもので唯一残っていたものだよ。これがなければ僕は、達彦と雅……。お前の本当のお父さんとお母さんの事だけだね……。を見つけてやる事が出来なかった。」

「……………」

食事の手を止め、桃香は沈黙したまま、魅入るように二つの遺品を見つめていた。その様子を、彼女なりに思うところがあるのだろう、と考えながら雅彬は静かに娘を見守っていた。

しばらくそうしていた時、ポツリと桃香が呟いた。

「ねえ、お父さん。……わたしの本当のお父さんとお母さんって、どんな人だったの？」

さて、どこから話していこうか……と、また暫く雅彬は逡巡した。

雅彬が初めて雅と出会ったのは、桐谷ではなくまだ旧姓の藤原だった頃、初めて交際していた紫苑の実家……、桐谷本家本邸を訪れた時だった。

そもそも紫苑と付き合うようになったのも、たまたま当時24歳の彼が勤めていた会社に26歳の紫苑が見学に来た時、彼女の借りたレンタカーが故障して立ち往生している所に、当時乗っていた白い中古のJZX81マーク？で通りかかり、そのまま広島駅まで送った時に互いの携帯の番号とメールアドレスを交換した事がきっかけだったから、彼自身彼女の苗字が桐谷だし、桐谷グループ系列の企業から何らかの関係があるとは薄々思っではいたものの、まさか彼女が桐谷グループの総帥で桐谷本家の当主である権三郎の長女だとは夢にも思っていなかった。だから彼女からこの事を聞かされた時、彼女の前では努めて平静を装ったものの、心の中で彼は仰天し、あまりの不釣り合なさから一時とはいえ彼女と別れる事も真剣に考えていた。

それでも、今日まで紫苑と別れるどころか結婚してまで一緒に暮らしているのは、彼が心底彼女に惚れていたからである。

紫苑は、雅彬のフィルター補正もかなり掛かっていたものの、出るとこは出て引っ込むところは引っ込んでいるスタイルが良い体型

で、しかも巨乳の長い黒髪がよく似合う美人であつた上に、自分より年上だつた所為か、姉さん女房的な、良い意味でも悪い意味でも世話好きでしっかり者だが、立てるところではきつちりと男を立ててくれる、当時でも珍しい、彼が理想とした古風な大和撫子だったので、彼女以上の女性などあり得ないと考えていた彼は、彼女と別れる事がどうしても出来なかつたのである。多分逆に彼女の実家がド貧乏であつたとしても一緒になつていただろう、という自信が彼にはある。それだけ彼女は魅力的だつたし、何より一緒にいると幸せで落ち着いた。多分これは彼女の方も同じだろうと彼は考えている。

兎に角、例え絶望的に不釣合いだとしても紫苑と一緒にする決意をした25歳の雅彬は、その当時一着だけ持つていた一張羅の少し型が古くなつていたニコルのスーツを着て、彼女に案内されるがまま、自分の81マーク?で桐谷本家にやつて来たのである。

日本有数の財閥で旧華族の家の本家のお嬢様と、地方の中小企業にやつとの事で就職できた一浪どころか1年留年までしたダメ人間の底辺層サラリーマン、しかも年下。どう考えても門前払いを食らいそうな彼が、ギリギリとはいえ権三郎と淑子夫妻に認められたのは、元々彼自身が、父親が医者、母親は大学の教授、母方の祖父は山陰地方の名士でその県の国立大学の学長を務めたことがあり、他の親戚の殆どが教員や公務員等、そこそこハイクラスな職種に就いているという、かなり上流の家庭の出であつた事と、礼儀・礼節・マナーと尊敬表現の使い方をはじめ、一通りの教養は身につけていた上に、常日頃から自分はダメな人間だという意識があつた所為か異常なくらい腰が低く、善良で誠実だつたからである。ひよつとしたら権三郎は、無気力と指示待ちと優柔不断な性格がダメ人間に落ちぶれた元凶であつて、雅彬自体は決して馬鹿ではなく、使い方次第で化けることを長年の経験から見抜いていたのかも知れない。

兎も角、雅彬は権三郎と淑子から、入婿として桐谷家に入り、紫苑の会社に就職して従業員として彼女を支え続ける事を条件に一緒になることを許された。そしてこの瞬間から、彼に対する康一郎夫妻と司、そしてこの時はまだ桐谷姓だった小依から嘲笑とバツシングが早速始まったのである。

その中で、権三郎と淑子を除けば、桐谷家で唯一好意的に接してくれたのが当時まだ20歳の大学生だった雅だった。これは後で知った事だが、雅は昔から姉である紫苑を慕って敬愛しており、雅彬に初対面から好意的だったのも、彼が自分の敬愛する姉が愛している人だったからという、至極単純な理由だったかららしい。

だが、それでも雅彬と紫苑にとつて、小依を除けば他の兄妹と歳が離れた末っ子故に他の兄妹から可愛がられていた雅を味方に着けられたのは、非常に大きかった。淑子は非力であり充てにならなかったし、仕事では厳しい権三郎も家庭では何だかんだと言いながら自分の子供達には甘かったからである。

そういう訳で雅の側に居れば、一時的とはいえ義兄達の誹謗中傷からエスケープ出来たので、彼女は新婚時代の彼ら夫婦の大きな拠り所になっていた。

結婚して2年経ち、洗剤用に開発した酵素や新しく売り出した発酵乳飲料が市場に出回り、漸く自分達の会社が安定してきた頃の事である。

この頃、権三郎はしょっちゅう政財界のパーティーへ雅を連れて回り、権三郎が仕事の都合でどうしても出席できないパーティーがある時は、紫苑と雅彬に彼女をそこへ連れて行かせ、兎に角片っ端から彼女と年が近い、パーティーに出席していた政界財界の若い御曹司と末娘を引き合わせて、見合いというか婚活パーティーのような事をやっていた。

というのも、その前の年に次女の小依が、彼女より3歳年上で雅彬と同じ年だった皆川 大毅というホスト崩れで評判の芳しくない男と、ほぼ駆け落ち同然に結婚してしまったからである。

雅彬は、当時から夜遊の酷かった小依がこのチャライホストに熱を上げ、大毅の方も彼女が桐谷家の娘だと知って金目当てに近付いたのだろう、と容易に想像できたが、権三郎は末娘の次に彼女の事を可愛がっていたので、愛娘がこんな屑男を結婚相手として連れてきた事に相当なショックを受けたのだろう。雅だけは親としてきちんとした男の元へ嫁がせてやりたいと、権三郎の元に届けられる大量の案内状の中で、彼の目に叶いそうな末娘と年の近い若者が出席する予定があるパーティーや会合があると聞けば、殆ど全てに董を連れて出席していたのである。

今から思えば、いや、当時の雅彬から見てもこれは権三郎の雅に対する自分勝手な親のエゴイズムだとしか思えず、あまり快く感じなかった。だが、結果的にこの権三郎の取り計らいが雅と達彦を結びつける切っ掛けとなったのだから、一概に義父を非難する事には出来なかった。

雅彬が最初に達彦が出会ったのは、こうしたパーティーに、義父の代わりに妻と共に雅を連れて出席した時だった。

当時、まだ存命だった達彦の父親の紹介で、彼と雅を引き合わせたのだ。

今から考えるとすごく可笑しい事なのだが、雅彬の達彦に対する第一印象は、背が高いとか好青年だとかと云った感覚的な物ではなく、舐められたらどうしようという危機意識だった。

その当時、というか今もだが、雅彬は身長が160cmと、妻と同じくらいの高さしかなかった。それに今でこそ歳相応以上に老けた感じがあるが、若い頃は現在以上に色白で、丸顔の童顔とほっそ

りとした痩せ体型の所為で、実年齢よりも5歳は若く見られる外観をしていた上に極度の近視だったので、180cmも身長があり体つきもガツツリとした、ともしれば5つも年上であるはずの自分より貫禄がある、健康的に日焼けした細マツチヨの爽やかな、しかも男から見てもかなりイケ面な好青年に年甲斐もなく相当のコンプレックスを抱いてしまったのである。

ところが、実際に会って話してみると、開成中学高等学校から東大理？を首席で卒業した雅彬など足元にも及ばないトップエリートなものにも関わらず、達彦は明らかに学歴敗者である彼にも色眼鏡で見るとは無く、礼節を持って接する事ができる、見たまんま通りの好青年であった。

しかも彼の筋肉質な肉体がそれを証明する通り、達彦は様々なスポーツを嗜んでいるようだった。雅もまたテニスが得意で、休みになると紫苑とよくテニス場に行っていたから、そういう点でも気があったのだろう。初対面の時から彼ら二人が惹かれ合ったのも別に不思議な事ではなかったと雅彬は今でも思っている。

兎に角、初対面から惹かれ合った二人の男女が深い仲になって行くまで、その時間は掛からなかった。

休日になると、達彦は桐谷家本邸まで雅を彼の愛車のダークグリーンのアストンマーティンで迎に来て、そのまま二人でテニスや、ゴルフをしたり、遊園地へ遊びに行ったりする事から始まり、段々と彼女の帰宅時間が遅くなっていき、そのうち彼女が朝帰りをする、二人だけで泊まりの旅行へ行ったりするようになった。

普通の男女の仲ならある程度のブレーキとなる周囲から受けるプレッシャーも、この二人の場合、その周囲が画策して取り繕った上で誕生したカップルだったものだから、周囲は負荷を掛けるどころか二人を煽っていたので、そのスピードは益々早まっていった。

そして交際から一年経ち、雅彬と紫苑が結婚3年目を迎えたある日、雅彬と紫苑は雅から、義父と義母には絶対内緒という前置きで秘密の相談を受けた。

「実は……、その……もう3ヶ月も生理がきていないの……。」
思いもよらぬ雅の衝撃発言を聞いて、雅彬は思わず飲んでいたお茶を噴き出して咽てしまい、紫苑は同じように顔を赤らめながら、二人揃って呆然と董の顔を見つめた。

産婦人科で一応検査して確認してみると、やはり雅の腹の中には、達彦との間に出来た小さな命が宿っていた。

雅彬は、それを紫苑経由で聞いて、雅と達彦のヤンチャぶりに半ば呆れながらも、元々二人の仲を応援していたので心の底から二人を祝福した。

結局、雅の懐妊が発覚したことで結婚式の予定が早まり、慌ただしい中で準備が執り行なわれたが、二人は両家の親族もとより二人の多くの友人達から盛大な祝福を受け、豪華な結婚式と披露宴を上げた。その時の二人が幸せそうに見つめ合う横顔を、雅彬は昨日の事のようによく覚えている。ちなみに、雅彬が達彦の紹介によつて孝彦に初めて出会ったのは二人の結婚式の時だった。

この時、既に雅のお腹は大分大きくなって目立ってきていたので、母体と胎児の健康を考慮して、この時は新婚旅行へ行くことは見送られてしまった。

そして結婚式から4カ月後、雅は元気な女の子を出産し、女の子は『桃香』と命名された。

桃香が生まれると、雅の両親と達彦の父親は、孫である彼女の事を、それこそ溺愛という言葉がきつぱり当てはまるくらい競って可愛がっていた。達彦の父親の方は、桜が初孫だったので分からない

でもなかったが、権三郎と淑子は、桜が初孫じゃないにも関わらず他の孫を差し置いて桃香を可愛がっていた。

第三者から見れば、それってお祖父ちゃんお祖母ちゃんとしてどうよ？という感じの態度だったが、その頃未だ本家に間借りして当主夫婦と同居していた雅彬から見ると、権三郎と淑子の態度も仕方がないと思われた。

権三郎と淑子の孫は、当時生まれたばかりの桜の他に、義兄の康一郎と綾音の子供達、当時小学5年生だった康史と小学2年生だった綾香がいたが、二人共親の育て方の所為か躰というものがまるでなつて無く、傍若無人でプライドが無駄に高い上に、祖父母には事あることに結構な額の小遣いを要求し、恐らく康一郎と綾音から吹き込まれたのだろうが、雅彬と顔を会わず度に、彼らの父親や母親と同じように人を小馬鹿にした態度を取つて失礼な暴言を吐いて行く、子供好きな雅彬から見ても子供らしい可愛らしさが見出せない程の糞餓鬼だったので、権三郎と淑子の愛情が康史と綾香ではなく、桃香一人に集中して向かつたのも無理もないと彼には思われた。

その後、突然石路コンチエルの社長だった達彦と孝彦の父親が心臓発作で急逝した事によって、その後を長男であった達彦が取締役社長に、次男の孝彦が同じく専務として石路コンチエルを継いだ後、半年から一年弱の期間が一番大変だった。

何せ当時、達彦は若干24歳、孝彦に至っては春に大学を卒業したばかりの22歳のヒヨツ子である。ヒラ社員として父親の元で修行するならいざ知らず、一大コンチエルのナンバー1とナンバー2として、会社を牽引していくには圧倒的に経験が少な過ぎた。

そういう意味で、取締役員の中でも、彼らを支援しようと精一杯バックアップをしようとする古株も居れば、経験の少なさを理由に彼らをトップとして認めない造反派も居て、一時的な事とは云え、石路コンチエルの業績は急降下で低迷し、最も逼迫した時は本当

に会社が分裂する数歩手前の時点まで陥りかけていた位だった。

ここからは、雅彬も仕事で達彦や孝彦に会った時と、紫苑が雅から聞いてきた事を耳にして総合的に推察した事だが、達彦と孝彦はそれこそ命がけで働いていたらしい。その功労によって、造反派の役員や社員の中にも、段々と彼ら兄弟をトップとして認める者が少しずつだが増えてきて、どうにか空中分解の危機を脱して、会社の業績も元の通り上向きに修正し、どうにかこうにか落ち着いた。

そして、さあ、これからだというときに例の事故が起こった。

前回から一年も経っていない急な社長の交代に、またしても石路コンチエルンに激震が走ったが、前回の反省と、孝彦もこの一年兄の右腕として死ぬ気で若年ながらも経験を積んできたので、役員会議でも全会一致で孝彦を次期社長にし、他の古株の社員が専務として彼をアシストする事で、特に混乱もなく石路コンチエルンはトップを達彦から孝彦へ交代した。そして今現在も孝彦は社長として石路コンチエルンを引っ張っている。

よく考えたら雅彬は雅とは5年、達彦とは3年弱の付き合いしかなかったが、雅彬にとっては、それまでの人生でトップ5以内に入る位、濃い5年間だったのだ。

第三話：父と娘

……と、ここまで一気に雅彬は桃香に、雅と達彦、彼女の本当の両親について自分が知って話せる事を、古いアルバムの中に見つけた、まだ生まれたばかりの赤ん坊を抱いてこちらを向いて微笑んでいる二人の写真を見せながら聞かせた。

桃香は、どこか感慨深そうに、初めて見る実の両親の顔を見つめていた。雅彬は何故かそうしている娘の姿にはつきりと、雅の面影を感じた。

よく見ると、いや……よく見ないでも、長くて質の良い肩まである長い髪に、二重で大きくぱっちりした目、小さいが面長な美人顔に華奢な体つき、そして紫苑ほどではないが服の下からでもその存在を主張するくらいはある大きな胸といい、要所々々を見てみれば顔つきといい体つきといい桃香は雅彬が知る雅にかなり似ていた。恐らくもう少し経って、彼が知り合った頃の雅の年頃になれば、ますますそっくりになるのだろう。

しかし、雅彬が知る限り、明朗快活で他人に対する思いやりがあり、純真で、誰からも好かれるが少々やんちゃな所がある桃香の性格は、まさしく達彦のそれをしっかりと受け継いでいた。

改めてそんな娘の姿を見ながら雅彬は、本当によくここまで大きくなってくれたものだ、と何かに感謝するように感慨に耽りながら、また昔の時分を思い出していた。

桃香を引き取る、そう決めてから最初に雅彬と紫苑が行ったのは家の模様替えだった。

達彦と雅が事故死する一月程前に今の家が完成した時、雅彬も紫苑も、子供がまだ居なかった上、その前の年に雅彬が殆ど正常な精

子を作る事が出来ない体質である事が発覚した為に、子供が出来る事は疾うに諦めていたから、家を建てる時から子供部屋のような部屋を作る心算は全くなかった。そこで、桃香を引き取る事になった折りに、家具を整理して、彼女の為に一部屋開けてやる必要があった。

ところが、幸いにも建てた家が少し広い一軒家で部屋数が多かった事もあり、雅彬と紫苑が夫婦の寝室として使っていた、2階にある紫苑の書斎の隣にある部屋を桜に与え、ダブルベッド等の家具を処分したり、他の部屋に移動させたりしてスツカラカンにし、壁紙も内装業者に頼んでクリーム色の物から女の子らしい薄い桃色に変更した。そして雅彬と紫苑自身は1階のリビングの、雅彬の書斎やキッチンとは反対側の食卓の側に続いて造られた、普段はリビングからは三枚、廊下からは2枚の襖と壁で仕切られた6畳の和室に、夜だけ布団を2枚敷いて就寝する事にしたのである。そしてこの生活は今現在も続いている。

次にした事は、桃香を自分たちの家に連れてくるために、車の後部座席に取り付ける為のベビーシートを購入する事だった。

達彦と董は、桃香の為に子供服やベビーベッドなど育児に必要な物を殆ど揃えて遺していたが、何故かベビーシートは買ってはいなかったのか、遺品の中には無かった。尤も、当時の達彦の車は2シートのMR車だったし、桃香も零歳で車に乗せて外に連れ回すような年でもなかった。ただ、達彦の家にミニバンの特集記事が載った自動車情報誌やカタログがあった事から鑑みて、いずれファミリーカーに買い換えた時に一緒に買う事はあっても、その時は必要なかったのだろう。

しかし、体を動かす事が好きだった行動的なアウトドア派の達彦と雅と違い、雅彬も紫苑もインドア派な上に、雅彬が重度の車好きで走り屋だったので、夫婦一緒での通勤は元より、休日等に夫婦で

買い物に行くときもいつも雅彬が車を運転し、旅行で遠出するときも高速を飛ばして行く事が多かったという理由で、桃香を引き取るに当たり、ベビーシートと言うものはある意味必需品だった。

そう云う訳で、その当時はもとより、今現在も世話になっているカー用品店へベビーシートを買いに行ったのだが、折しも昨今の小さな子供の後席シートベルトの巻き込み事故を受けた規制によって巻き込み固定するタイプのシートベルトが禁止され、代わりにチャイルドシートを固定する専用の金具を後席シートに設置する事が法律の改定で義務付けられたために、店で取り扱っていたのは専用金具で後席シートに直接脱着固定するタイプだけで、雅彬の車のような古い車に取り付けられるような従来型のシートベルトで固定できるタイプの物はもう売ってはいなかった。

仕方ないので当時乗っていた車全てのリアシートの左側にだけ二つセットの専用金具を後付で取り付ける加工をそのショップで頼み、その上でその当時一番安全性と耐久性で評判が良かった上位機種を買ったのは、雅彬にとっていい思い出である。

桃香を家に連れてきたら連れてきたで、当然の事ながら雅彬と紫苑の夫婦生活は劇的に変わった。

何せ、何から何まで手探りで育児である。桃香が泣けば、二人共すぐに彼女のもとへ飛んで行き、お腹が空いたのか、それとも漏らしてしまったのか、と二人でああでもない、こうでもない、赤ん坊が何故泣き始めたのか、その理由を手探りで考えるという日々が続いた。

そうした生活の中で、雅彬と紫苑を一番悩ませたのは桃香の食事だった。

どうも生前に雅は完全母乳で桃香を育てていたらしかった。その為には彼女は、ミルク自体は飲むものの、粉ミルクを哺乳瓶から飲む

事を極度に嫌がった。そしてその度に紫苑の乳房にしがみついて、その乳首に吸いついた。

しかしながら、いくら紫苑のおっぱいが大きいとはいえ、孕んだ事もない彼女から母乳が出る訳もなく、どうやって桃香に哺乳瓶からミルクを飲ませるのか苦慮し、試行錯誤する日が続いた。

結局、とうとう桃香が哺乳瓶に慣れる事は一切なく、蓋を外した哺乳瓶に入れたミルクを新品で清潔なスポイトに吸い取って移し、それを紫苑の胸の乳頭付近に垂らして、双丘の片割れをミルクでグチャグチャに濡らしながらどうにか桃香にミルクを飲ませるといふ荒業を使う日々が続いた。

桃香が乳離れするようになると、今度は離乳食をどうするかという問題が持ち上がった。

雅彬も紫苑も、離乳食というと、兎に角食材を食べやすいように具材を細かく切り刻み、成長に合わせて食べさせていい物と、未だ食べさせてはいけない物があるらしい、という事は常識として知ってはいたが、具体的にどの位の大きさまで切ればいいのか、具体的に何ヶ月の時に何を食べさせたら良くて何を食べさせたらいけないのか、という知識は殆ど持ち合わせていなかった。雅彬は女子大で家政学の教授をしていた母親に連絡して教授を請い、情報が正確で詳しく書いてあるような離乳食関係や他の育児本を教える貰い、それらの本を書店やアマゾンで見つけ次第買いまくり、紫苑と二人で読んで勉強して桃香の食事を用意してやる生活が続いた。

幸いにも桃香は、おむつからパンツや、おまるからトイレの躰、風呂の世話や月日や時計などの数字や簡単な平仮名の読みや社会常識など、基本的な躰や学習は、覚えが速かった事もあり、覚悟した程度の苦労は殆どしなかったが、その代わりに彼女は物凄く好奇心が旺盛で目について触ったものはすぐに口に入れようとすると、しかも元気が良く、ハイハイを始めるようになると、あっちへヒョコ

ヒヨコ、こつちへヒヨコヒヨコと、それこそ部屋どころか家中をちよこまかと移動するので一秒たりとも目が離せなかった。

桃香が来たことによってもたらされた変化は別に子育てばかりではなかった。雅彬と京都にある彼の実家の関係が、桃香が来た事によつて少し悪くなった、というより複雑になった。

というのも、雅彬が彼の実家に、家族三人で初めて帰省した時、仕方が無い事だったのかも知れないが、父の浩彬と母の智恵は、桜と雅彬の弟の3歳下の孝彬の二人の子供、つまり雅彬にとって甥に当たる当時5歳の信彬と2歳の善彬、を比べて差別というか、桃香の方にやや冷たく当たっていた。

今となつては雅彬の両親も理解を示し、彼の実家とは良好な関係を築けてはいるが、当時の彼の父母に取つては、幾ら息子夫婦が決めた事で、且つ桃香が桐谷家の血縁筋だとしても、全く血の繋がりが無い他人の子供を息子が自分達の『孫』だと思つて接してやつてくれ、と言つて連れて来た事が心の奥底では快く思えなかったのだらう。いくら自分達の事で手一杯だったとはいえ、当時の自分の両親に対する態度は余りにも思慮に欠いていたと、雅彬は今でも悔いている。

兎に角、桃香を引き取つて1年程は、正直軽々しく引き取るなんて言わなきゃ良かったと思ひ掛けた事も何度かあった。

しかしながら、それでも桃香が雅彬と紫苑にもたらしてくれた物は決して悪いものばかりではなかった。

現に騒がしくなつたとはいへ、桃香が来たことで雅彬と紫苑の生活は確実に賑やかで楽しい物になつたし、彼女が七五三、幼稚園、小学校、中学入学、十三参りと成長して人生の節目に立つ度に、そして誕生日やクリスマスなどの年間行事を通して娘の成長を実感しながら動画や写真を撮り、それらを見返してその成長を実感する度

に、報われると言えば多少の語弊があるかも知れないが、彼ら夫婦は彼女を育ててきて本当に良かったと、実感というか感慨に耽る事が出来たのである。

だが、惜しむべきは本来、今の自分達の立ち位置にいる筈だった達彦と雅と共にこの喜びを共有することが不可能であるという事だった。死んだ二人がもう二度と味わえないであろう喜びを噛み締める毎に、雅彬はあの世にいる彼らに対して物凄く申し訳ない気持ちになった。それに反して、桃香が元気に成長する度に、実子以上に彼女に対する愛情が強くなり、この娘と離れたくない、平凡でも家族三人での生活が何時迄も続けばいい、でも娘に本当の両親のことを話せば、彼女は自分たち夫婦の元を離れてしまいかも知れない、と雅彬は心の何処かでそう思っていた。

だからこそ、今の今まで二人の存在を桃香に話す事は無かったのである。

その代わりに、草葉の陰にいる達彦と雅へのせめてもの慰めとして雅彬は事故の慰霊祭に出席する度に、一年分の桃香の成長記録の中の動画や写真をPCで編集してBDに焼き、そのBDと小型のBD対応ビデオカメラを引っ提げ、彼らにも桜の成長を三途の川の向こう側で見て喜んで貰おう、と彼らの霊前へカメラの液晶モニターを向けて上映して祈っていた。

15年経った今でもなお雅彬は、達彦と董が死んだ原因は自分にあると、後悔していた。

もしあの時、達彦の提案に乗らず、秘密の計画を二人に実行しないように説得していれば、きっと例の事故機に乗る事はなかった。そもそも、彼が義弟に義妹と旅行へ行ってきたら？と軽々しく提案しなければ、二人は未だ現在も元気に生きて現在の自分達の立ち位置に居り、桃香と家族3人で、ひよっとしたらもう一人二人増えて

いるかもしれないが、幸せに暮らしていた筈だ。そう思う度に雅彬は胸の奥が冷たくなって重くなり、息苦しくて辛かった。

その所為か、いつの頃からか雅彬は、あの世で雅彬と紫苑を恨んだ達彦と雅が、雅彬と紫苑から桃香を取り上げるために、自分達と同じように彼女を飛行機事故に遭わせて一緒に冥界へ連れて行くという悪夢に、何ヶ月かに一度だが悩まされるようになった。

だからこそ彼は、その夢が正夢にならないように、態々桃香と飛行機を引き離すように立ち回るようになったのである。

食卓で箸を進める手を休めて、実の両親と幼い頃の自分自身の写真を見ながら考え込んでいる桃香の様子を見て、雅彬は一抹の不安を抱きつつも、胸の中で突っ掛つていた物が取れたような、これだよかったのだと安堵していた。後は運命に委ねて自分は事態をただ見守ろうと、そつとその場から立ち上がると書斎の方へ引っ込んでいった。

翌日朝食を食べに自分達夫婦がいるリビングへ桃香が降りてきた時、彼女が案外元氣そうに見える事に、雅彬と紫苑はホッと安堵した。

そして桃香が、

「お父さんとお母さんが、本当のお父さんとお母さんじゃないって聞いて最初は驚いたけど、やっぱりわたしのお父さんとお母さんは、お父さんとお母さんだから。」
と言ってくれたのを聞き、雅彬は正直とても嬉しく思った。

食事中、桃香は雅彬に修学旅行へ行かせて貰えるように懇願した。長きに渡る厳冬を越えてやっと暖かな春を迎えた連山のように穏やかな雰囲気を見に纏った今の父親が相手ならば、十分勝算があると踏んだのである。

「お父さん！お父さんは反対するかも知れないけど、わたし修学旅行に行きたいの。だから行かせてください。」

だが、桃香と紫苑の予想に反し、雅彬は素直に首を縦に振ろうとはしなかった。

「……少し、考えさせてくれないか？」

「え？」

「あなた……。」

「出来ればお父さんもお前を修学旅行へ行かせたいさ。けどその行き先が飛行機を使わないと行けないような遠い異国なら話は別だ。そう軽々しく子供を行かせる事は、お父さんには出来ない。」

雅彬は今まで娘に真実を隠していたという後ろめたさからは確かに開放されたが、達彦と雅が桃香を連れて行ってしまつのではないか、という幻想に未だに取り付かれていた。

その上、そうでなくても2週間も言葉が通じぬ遠い異国へ、修学旅行とはいえ高校生の娘を行かせて大丈夫なのか？と半ば深刻に心配していた。

そんな父親の心情などいざ知らず桃香は、

「……そんな！どうして？」
と叫んだ。

「心配なんだ。もし飛行機が事故に遭わなかったとしても、子供が2週間も遠い異国へ行くんだぞ。もしも逸れて迷子になったらどうする？親なら心配して当然だろ?!」

「心配つて、お父さんが、飛行機が嫌いな事をわたしに押し付けているだけじゃない！それに親なら心配して当たり前だなんて軽々しく言わないでよ。本当の父親じゃないくせに！お父さんなんか、知らない！」

そう雅彬に向かって怒号を浴びせると、桃香は走ってリビングから廊下へ出て行った。

「待ちなさい、桃香！」

紫苑は咄嗟に娘を追いかけようとしたが、

「よせ。」

と、雅彬に制止された。

「でもあなた……。」

「あの娘の気持ちを考えずにあんな事を言ってしまった僕に非がある。あの娘は悪くない。そっとしておいてやれ。」

そう言ってみたものの、しまったなと後悔しながら雅彬も出かける準備をし始めた。

朝っぱらからの険悪の空気を感じたまま、シルバーメタリックの初代フーガGTのハンドルを握る雅彬は、信号待ちで止まる瞬間ルームミラーへちらりと目をやり、リアシートの左側に座って右側のセンターに学生鞆を置き、窓の内張りに肘を掛けて頬杖を突いて未だに不貞腐れている桃香の様子を観察した。

桃香が来てから、紫苑は在宅勤務が主になったので、基本的に会社の方には雅彬一人が通勤していたが、娘が中学に上がって電車通学となり、彼が出勤する時間と彼女が登校する時間が上手く被るようになってからは、毎朝彼女を車の後部座席に乗せて、徒歩10分、車でぐるりと回れば5分ほど掛かるところにある最寄りの地下鉄の駅か、それか車で20分程掛かるところにあるJRの駅まで送り届ける事が彼の日課になっていた。

大雨が降っている訳でもないのに、娘が遅刻しないようにと思つて車での送りを、家にいる限り毎朝している雅彬に対し、当然のように周囲の人間は皆、娘を甘やかしすぎだ、と非難していたが、普段から家にいて娘と接している紫苑と違い、昼間は本社や秋葉原の営業所に勤務し、その上出張で家に居ない事も多く、基本夜から翌朝位しか娘と顔を合わせる機会がない雅彬にとって、5分から20分程度とはいえ娘とコミュニケーションが出来る数少ない時間が毎朝の見送りの時間だったので、この習慣を止める気は全然なかった。

そして桃香の方も、普段家に居ない父親と一緒に入られる少ない機会でもあり、また、母が朝の弁当の用意等が遅れて電車に乗り遅れて遅刻しそうになっても、雅彬が車で送ってもらう事によって電車に間に合って遅刻せずに済むので、父親の好意に思い切り甘えている節があった。

この日の朝も母親の弁当の用意が遅れた事と、先に車を近くに持っている駐車場へ車を取りに先に出た父親の弁当を、自分の弁当を受け取る時に一緒に父の所に持って行ってくれと母から頼まれたので、いつも通り桃香は父親の車に乗り込んだ。

信号が青に変わるのを待ちながら、頭の中で桃香がいつも乗っている電車の時刻と最寄りの地下鉄の駅の構造、後どの位で駅に到着出来るか？等と時計で時間を確かめて考えながら、今この時間なら地下鉄の方でも間に合うな、と思った雅彬は彼女に、

「多分間に合うと思うから、今日は地下鉄でいいよな？」

と聞くと、彼女はまだ機嫌を損ねているのか、腕時計で時間を確かめると不機嫌な声で、

「うん……。」

と答えた。

暫く走ってから地下鉄の入口の前辺りに、ハザードを焚きながら車を左に寄せて停車すると、雅彬は学生鞆を持って車から降りようとドアノブに手を掛けた桃香に、運転席から声を掛けた。

「出る時、後ろの方とかに気を付けて出るよ。」

「……わかっている。」

「あと、気を付けて行くんだぞ。」

「……うん、行ってきます。」

「……ああ、行ってこい。」

いつもよりやや乱暴にバンツと音を立てながら車を降り、地下鉄の入口から改札へ続く階段を駆け下りていった娘を、姿が見えなく

なるまで見送ってから、こりや完全に嫌われたか？参ったなあ……、
と思って雅彬は苦笑した。そしてハザードを切って右ウインカーを
点滅し、後続する車に注意しつつ車を発進させると、彼は一路会社
に向かって走りだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9390v/>

継家族

2011年9月6日15時52分発行